本居宣長 篇2

萩はらの里

菅笠日記（すががさのにっき）によると、本居宣長（もとおり のりなが）らの旅の行程は次のとおりです。

明和9年（1772）3月5日：松坂（松阪）→青山、6日：青山→名張→室生（大野）→榛原（萩原）、7日：榛原→西峠→角柄→吉隠→長谷→多武峰、8日：多武峰→吉野、9日：吉野、宮滝、10日：吉野→飛鳥、11日：飛鳥→橿原、12日：橿原→桜井→榛原（萩原）、13日：榛原→室生（田口）→御杖→美杉（多気・石名原）、14日：美杉→松坂（松阪）。

この行程から、行きは「伊勢表街道（あお越道）」、帰りは「伊勢本街道」を通ったことがわかります。

3月6日、一行は三本松宿を通り、当時から有名であった大野寺の磨崖仏（弥勒菩薩像）を参拝しています。この日のうちに初瀬まで歩く予定だったのですが、雨が降り、疲れてしまったので、初瀬で泊まるのをあきらめ、榛原（萩原）に泊まっています。

宣長は、「萩原」という地名をなぜか懐かしく思い、次のような歌を詠みました。

うつしても　ゆかまし物を　咲花の　をりたがへたる　萩はらの里

（もし、萩の咲く秋だったら、その花の色香を袖に染みこませて行こうものを、咲く花の季節を違えて来たのは残念だ。この萩はらの里）

萩原という地名から、宣長は「ここ萩原を訪れるのが3月ではなく、萩の花が咲く秋だったら良かったのに」などと思ったのでした。